



私の人間食へ歩き

千夏千記



中山千夏

・千夏千記

・発行——一九七二年九月三〇日

・著者——中山千夏©1972

・装幀者——石岡瑛子

・発行者——大和岩雄

・発行所——大和書房

・住所——東京都文京区関口一—三三—四

・電話——(二〇三)四五一一

・振替——東京六四二二七

・印刷所——信毎書籍印刷

・製本所——誠幸堂

・コード番号——0312-100010-4406

千夏千記―目次

序文を兼ねた子役日記 1

戦う記

私の結婚生活 21

とまらない汽車

教えてよアリス

実践的主婦論

甘えについて

潜る記

私の裏社会探訪 61

出歯亀

夜のトンボ

マンモスバー

緑の花たち

秘密クラブ

赤坂外人

最後の幫間

アングラ芝居

言う記

私の悪口雑言

161

金で済む話

ロボット

子殺し

防毒マスク

対日意識

塵芥界

公僕

色魔

寄席

既製品

望遠鏡

標識

工事

成田のよねおばあちゃん

観る記

天下の犬もの

193

佐藤栄作 立木義浩 日野皓正 ビーター
三浦雄一郎 田村順子 高倉健 山村新治郎
池田大作 川上宗薫 野平祐二 宮田輝

序文を兼ねた子役日記

運命を変えた幼稚園

私は、昭和二十三年熊本に生まれた。ものごころついたころには、宮崎に住んでいた。四つの時に大阪へ出て、両親は薬局を開業し、翌年私は近所の平和幼稚園というところへ通い始めた。両親がこの、のどかな名前の幼稚園を選んでくれたために、私の人生はヤクザな方向へ決定してしまったのである。

私の知り得る限りでは、私の血筋に芸能関係の人は一人もいない。母方の祖父は小学校の先生で、その父は台湾で新聞社を経営したそうで、その出身は福井の多額納税者なんだそうだ。母方の祖母は平凡な主婦、その父は地主百姓、その嫁は西南の役の時、本陣になったサムライの家の娘である。私の父は薬剤師で、その父は小学教員、母も教員、その父はどこやらの村長、という具合で、やみくもにお堅い。もっとも、この場合の私の父というのは血のつながらぬ養父であるが、生みの父の事はよく知らないのはぶく。

とにかく私のような軟派が出る要素はほとんどなかった。ただ、奇妙なのは一人いる。母方の祖母の弟である。何でも目新しいことが好きで広大な土地いっぱい百合を植えたのだそうだ。百合根を輸出す

るというのだ。ところが、百合の花が開き、村中が百合の香りに包まれるころ、ふいと日本を捨ててフィリピンへ渡り、自転車屋を始めてしまった。もちろん百合根輸出の計画は立ち消えとなり、残ったのは香りだけである。フィリピンでもある程度の成功をおさめたらしいが、それもまたふいと捨てて熊本の百姓に逆戻り、今でもそこにいらしいが、その人の話を聞かされた時に、私はひょっとすると、この人の支離滅裂なところをいただいてしまったのではないかと考える。

まともにいけば、今ごろ、眼鏡でもかけた婦人薬剤師のはずであった。それがこんな事になったのは、平和幼稚園のせいである。平和幼稚園の福尾先生という、ちょっと三日月さんみたいな顔をした、小柄な女性のせいである。この人が、めっぼう歌や芝居の好きな人で、私は彼女お気に入り、歌手であり役者であった。お遊戯会には主役で赤ずきんちゃんの大ミュージカルをやった。彼女の指導で毎日放送の音楽コンクールにも入賞した。

そのくらいですめば問題はなかったのである。

昭和三十年四月、関西における標準語の権威だと言われていた泉田行夫氏が、大阪で初めて児童劇団をつくるといううわさを、幼稚園の

福尾先生が聞きつけた。そして熱心に私の母を説得したのである。

この子は歌や踊りや芝居がうまい。ぜひともその才能をのばしてやるべきである。情操面でもおおいにプラスするに違いない、てな事をいったらしい。

家の者たちは人並みに芸事が好きで、私にきらいな日本舞踊を習わせて喜んだりはしていたが、児童劇団についてはちょっと考えた。考えた結果、別に役者になるというわけではないのだから、当人がやりたければやってもよからうということになった。

母が私に劇団へ入るかどうかたずねると、私は、劇団とはいかなることをする所か、と反問し、母が、幼稚園のお遊戯会でやった赤ずきんちゃんみたいなのをする所だと答えると、私は、入る、と答えたそうである。なにしろ当時六つであった。しかし、十七年という芸能生活の第一歩を、自ら踏み出したことは認めなければならぬ。

劇団の名は「劇団ともだち劇場」という。創立者泉田行夫氏の目的は、子供に標準語を教え、児童劇をさせてへき地の学校などを慰問する、というものであった。当時まだ民放TVも始まっていなかったし、子役貸し業など想像の外だったのである。規定は小学校三年以上だったが、福尾先生のキモ入りと、入試一番の成績のおかげで、一年生の

四月から毎日曜日、私は劇団へ通うことになった。

入団して三カ月目に、はやくもマスコミの仕事をするはめになる。TBSラジオの「人情夜話」というラジオドラマを、大阪で録音することになった。

千日前の歌舞伎座へ呼ばれていたら、やさしい太ったおじさんが客席へ案内してくれた。終演後、ABCで録音が行なわれた。たくさんのおとなたちはスタジオの中で夜食の握りずしをばくつき、中で一番偉そうなおばちゃんが、私にもすすめてくれた。やせたおじさんがなまりの無い子だとほめてくれた。

太ったおじさんは金田竜之介氏、おばちゃんは水谷八重子氏、やせたおじさんは大矢市次郎氏であったのである。

花菱氏との出会い

OTV開局前夜祭の番組に出演したのが、私とTVとのそもなれそめであった。手品の番組で、種はわかっていたけれど、いわれたとおり、私はあっと驚いてみせた。昭和三十一年、小学校二年生の時である。

以後、三年生で児童劇団を卒業するまでに、TVやラジオの仕事は段々ふえていった。卒業と同時に、TVで何度か一緒に仕事をしたこ

とあるシナリオライターから、新しく結成するタレントの会に入
ことをすすめられた。もともと、私自身はこの辺の事情を覚えてい
ない。家の者たちは、当人も喜んでやっていることだし、児童劇団の続
きぐらいに考えて、その「波の会」という会へ入れることにした。

背の高いベレーをかぶったシナリオライターは花登篋氏である。氏
は、小さい私を、それこそ目の中に入れても痛くないほどかわいがっ
てくださった。私は、仕事のことはすぐ忘れてしまうが、そのほかの
ことは割り合よくおぼえている。花登氏作の芝居をしている楽屋へ、
氏がおみやげを持って来てくださったことがある。おみやげは、赤い
小さな子供用のハンドバッグであった。喜んで開けたりしめたりして
「先生ありがとう」といったら、氏が「先生いわんと、ババというて
み」といわれた。私はとまどった。「ババいうたら、また何か買うた
げる、いうてみ」と氏は続ける。何度か促されたあげく、私は小さい
声で「そやかて、お父さん家にいるもん」と答えた。氏はがっかりし
た顔をされた。その顔を見て私は、あ、ババと呼べばよかったな、と
思った。

なぜ呼べなかったのか。今、考えるのだが、きっと私は子供なりに、
氏の背中に時々ちらりと見える厳しい暗さを感じして、親しみと同時

に一種の恐れを抱いていたのではなからうか。

その後、波の会から現東宝社長松岡辰郎氏の大宝芸能にひき抜かれたとき、子供にはわけのわからぬいざこざがあって、花登氏は松岡氏や私の母に対して激怒され、それは十年近く続いた。私が舞台から再びTVへ戻った昭和四十五年、フジTVの「五代家の嫁」で再会したとき、私は変わらぬ氏の姿を見てすぐに赤いハンドバッグを思い出したが、もうパパと呼ぶわけにはいかなかった。十年の月日は長い。私はもう二十一になっていたのである。

本格的商業演劇へ

昭和三十四年の一月末、四年生の私は梅田コマ劇場に呼ばれた。舞台はいこ中の客席へ連れて行かれた私のところへ、舞台から大柄なおばさんがおりて来て「うん、このくらいの大きさならいいわ」といった。まわりのおとなたちが恐縮して頭を下げる。「ちょっと毛が長すぎるわねえ。このくらいでなきやダメ」おばさんはニコリともしないで私の長いおさげをつまみあげ、そういった。私は、毛を切られることを何よりも恐れていたので、これは恐ろしいおばさんだとちぢみあがった。

結局、おさげを折りまげてリボンで隠すことが許され、私はこの一

見恐ろしいおばさん、三益愛子氏の娘として、川口松太郎作演出「母」に出演したのである。

これが本格的な商業演劇（というのも何か変だが）にふれた最初であった。子供なりに、全国的に有名な俳優たちと同じ舞台を踏んでいるのだ、ということはわかる。古川緑波氏と三益氏がエレベーターの中で、ミートパイを食べたと話しているのを聞き、私はミートパイなんて見たこともないから、さすがに有名な俳優が食べる物は違うものだ、と感心したりした。

三益氏は今も昔も相手がおとなであろうが子供であろうが、仕事となると厳しい。しかしつきあうほどにそっかしくて親しみ深い人だとわかる。母ものの権威だけあって、ちゃんと子供の心を知っておられ、お人形など与えて下さった。

緑波氏もやさしい方であった。薬が好きで、手のひら一杯に様々な錠剤を乗せ、ぼりぼりと食べ「おいしいよ」と私を見て笑いながらそういわれた。

芝居はおとなの世界である。おとなたちのことばや視線は、小さい私の頭上を通してめまぐるしく行き来する。私は好奇心でいっぱいになりながら、それを見あげ、その下を駆けめぐり、何かを発見するの

に忙しかった。時々私に気づいたおとなが、ほめてくれたり頭をなでてくれたりする。そしてすぐに子役の事など忘れて、おとなの世界に戻るのだ。

「母」での私は評判は良かったようである。自分でつくった舞台を見ながら川口氏がポロポロ泣いて「あの子、うまいね」といったという話を、後から聞いた。

菊田一夫氏と共に

昭和三十四年二月公演の「母」が終わった後、松岡辰郎氏の熱心な勧めに従って、私は波の会から大宝芸能に移籍した。家の者たちも、プロになるつもりは毛頭なかったが、同じやるのなら大きな舞台を踏めた方がいいだろうという、TV局のプロデューサーや作家の意見に耳を傾け、移籍させることにしたらしい。

私はただ、面白がって走りまわっていただけである。演ずる、ということの、どこが幼い子供をひきつけたのか、今だにさっぱりわからない。きげんよくやっていたらいいから、好きだったんだろう、とかいいようがない。そのころの感覚は、きれいさっぱりなくなつて、他人事のように推理する他ないのである。

その年の八月、梅田コマ劇場の「たけくらべ」に出演が決まった。

その前の舞台で私に目を止めた菊田一夫氏が、私のために役をひとつ書いてくださったのである。母は、あまりの幸運に少なからず興奮し、菊田氏がいかに偉い人であるか、伝え聞いた話を私にして聞かせた。

不思議なことに私の人生を決定するカギとなった菊田氏との出会いを、私は少しも覚えていない。思い出そうとすると、氏のメガネの奥で笑っている目やくちひげがイメージとして脳裏に浮かぶだけなのである。東宝を出るまで九年間もお世話になった方なのに氏とのエピソードや氏のことばは消え去って、あの子供みたいな笑顔ばかりが、強く心に焼きついている。これはきっと、いつも私の方が偉い人なんだ、と思って話などうわの空に顔ばかり見ていたせいだろう。そして、氏は、たいてい笑顔で私にこたえてくださったのだろう。私は、このイメージの笑顔を、とても大事に思っている。

「たけくらべ」での私も好評であつたらしい。となると、風当たりも強くなる。二畳ばかりの三角形の楽屋で、あなかけうどんを食べながら、母が、情けない、情けない、と悔し泣きしていた光景を思い出す。私はうどんをすすりながら母をなぐさめていた。私の方が図々しいのだろう。今までに、仕事のことで私は二度しか泣いていないが、母は十回は泣いている。

子役この不自然なるもの

菊田氏から上京しないかといわれたのは、「たけくらべ」の舞台がいこの時であった。

昭和三十四年九月、私と母は台風と共に上京した。そして、今はいく半ば伝説化している芸術座の「がめつい奴」に出演し、東宝演劇部の最年少契約者となり、十一月には銀座泰明小学校に転校した。

これで、私の運命は決定してしまった。まわりが作りあげてくれて、私がずるずるついて来た運命である。その中で私は、様々な経験をし、様々なクセを身につけた。今の私は、この小学校五年から中学三年位までの間の、子役時代の上に成り立っているといっても、決して過言ではない。

子役というものが、どんなものであるか、どんなに不自然な状態を要求されるものであるかご存知だろうか。

まず、子役は子供であってはならない。仕事においては、おとなと同じ状態で働くことを要求される。何かをしたい時にはする、したくない時にはしなくてもいい、というのが子供の特権であるはずなのに、子役にはそれが許されない。

今日はいやだからといって舞台を休むわけにはいけないのである。